



場所：奈良県大和郡山市、矢田寺大門坊露地／日時：2017年10月4日

# 「形のない、あっても気がつかない、水や空気に近い世界」



古川三盛(ふるかわ・みつもり)

1943年、福岡県に生まれる。鹿児島大学農学部卒業。作庭家。北九州市・菅原清風園、京都・徳村造園に勤務ののち、1970年に独立。主に森縊の作庭に従事。主著に『庭の憂』『善本社1997年』のほか、雑誌「庭」「銀華」「チルチンピ」となど連載多数。

●1970年、森先生と一緒にこの矢田寺大門坊露地を作られてから、古川さんはずっと手入れをされていますよね。古川さんにとっては特別な場所ですか。

古川…私にとって、この場所はいへん思い出深いところです。小山(潔)が作

庭にかかっていましたが、私は途中から入り込みました。今思えば、ほんとうに迷惑だっただろうなと思いますが(笑)。その時点で大半の構成はできていて、あとは仕上げをするだけでした。

今は大刈込になっていますけど、もともと、ここは自然の雑木林でした。背の高い木々に覆われて、何も見えなかったのですが、それをばっさり切ると、最高の見晴らしが現われました。ここは、ただ単に景色がいいというだけでなく、奈良盆地を目の前にして、長い歴史を偲ばせる場所です。ほら、若草山も東大寺の大仏殿まで見えますでしょう？当初は南までもう少し開けていましたが、向こうのヒノキとかが大きくなったので、眺望の範囲が少し狭くなりました。

露地を作るときに、ここにあった木々の高さを揃えたただけで、新しく植えたものではありません。ここから見ると、大刈込は高さ1メートルぐらいしかないように見えるけど、じつはガクンと崖になっていますから、4、5メートル以上あります。2段のはしごをかけても届かないぐらい。ほとんどはシャシャンボですから、最上級の大刈込ですよ。

とにかく、大刈込と開けた眺望。修学院離宮とは比べられない小さい庭ですが、捉えどころはやはり同じです。見晴しだけは修学院に負けません。

●そもそも、森先生に惹かれた理由は何ですか。

古川…私は農学部出身といっても農芸化学ですから、お酒をつくったり、味噌をつくったりしていて、造園界はまっ



矢田寺大門坊の茶室「一如庵」に続く露地(マレス、2013年撮影)





自然石と切石の飛び石が茶室「一如庵」を囲む（マレス、2013年撮影）

歴史的な庭園の修理や復元とは違って、作庭の場合はあるように、できるようにというのが森先生の趣旨でした。図面を描いていても縛られていませんでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わりました。石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわけですよ。そこが一番驚いたところです。地形ができたら庭はできたようなものだとおっしゃっていました。それに、石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳裏を横切りました。その後唐招提寺の庭を見て、この世界に身を沈めることができると思ったものでした。

たく知りました。体もあまり強くないほうだったけど、縁があつて、卒業後に郷里の北九州の造園屋さんに入りました。それから、鹿児島大学の西田正義先生を通して村岡正先生を紹介していただき、そして最終的には森先生にたどり着いたわけです。でも、造園の勉強をしていなかったものですから、森先生の名前すら知りませんでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。

森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的

なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の

頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わりました。

石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわけですよ。

そこが一番驚いたところです。地形ができたら庭はできたようなものだとおっしゃっていました。

それに、石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳裏を横切りました。

その後唐招提寺の庭を見て、この世界に身を沈めることができると思ったものでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。

森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的

なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の

頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わりました。

石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわけですよ。

そこが一番驚いたところです。地形ができたら庭はできたようなものだとおっしゃっていました。

それに、石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳裏を横切りました。

その後唐招提寺の庭を見て、この世界に身を沈めることができると思ったものでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。

森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的

なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の

頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わりました。

石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわけですよ。

そこが一番驚いたところです。地形ができたら庭はできたようなものだとおっしゃっていました。

それに、石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳裏を横切りました。

その後唐招提寺の庭を見て、この世界に身を沈めることができると思ったものでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。

森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的

なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の

頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わりました。

石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわけですよ。

そこが一番驚いたところです。地形ができたら庭はできたようなものだとおっしゃっていました。

それに、石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳裏を横切りました。

その後唐招提寺の庭を見て、この世界に身を沈めることができると思ったものでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。

森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的

なものをもっておられましたね。森先生と出会って、私の

頭の中にあつた否定的な庭のイメージはガラッと変わりました。

石の形がどうこうではなくて、庭は地形だというわけですよ。

そこが一番驚いたところです。地形ができたら庭はできたようなものだとおっしゃっていました。

それに、石組も軽く、連続性があり、最初に見たのは多賀大社の式場の庭でしたが、その時モーツアルトのピアノソナタが脳裏を横切りました。

その後唐招提寺の庭を見て、この世界に身を沈めることができると思ったものでした。

しかし、森先生のもとで庭の仕事をしてわかりました。

森先生なしには考えられない世界でした。単に研究だけではなく、そのセンスといいますか、それまでにない基本的



茶室の脇に配置された手水鉢と石灯籠（マレス、2013年撮影）

●森先生は学者として地形の測量にこだわっていたし、庭を作るときも、現実実測図を作ってから設計図を描いていたようです。しかし、この矢田寺大門坊露地の場合は図面を作らずに、現場で直接作庭にとりかかったということが『庭ひとすじ』（学生社 1973年）に書いてあります。

古川…森先生の庭の場合、図面はほとんどないのも同じですよ。ある程度の雰囲気を図面で示しても、あとは、やっぱり現場に合った庭づくりが一番大きなテーマですからね。

森先生は現場につきっきりというわけにはいかないの  
で、ある程度こちらで作ってから見に来られていました。  
ここはこうしたほうがいいのか、また何かを付け加えるよ  
うな指導をされていました。図面とまったく違う場合もあ  
りました。それが、それほど叱られたりはしませんでした。基本  
的には石を深く埋めて、大きく見せることはなかったです  
ね。大きすぎると思ったら、その近くに木を植えて小さく  
見せるようにしていました。石が10個あったら、10個で庭  
を作るし、5個しかなかったら5個で作りました。

石だけではなく、森先生は灯籠に関してもこだわりがあ  
りました。目立つものを取り入れてしまうと、その庭を象  
徴してしまうでしょう？ たとえば、立派な家を建てたの  
に、床の間に安っぽい掛け軸をかけるようなものです。そ  
うすると、家全体が掛け軸の値打ちで見られてしまいます  
よね。主人の心まで見られてしまいます。いい掛け軸がな  
いなら、掛け軸をかけないほうがいい。花一輪を生けるぐ  
らいでいいんですよ。灯籠も同じです。

あの頃、古い雑誌で森先生が灯籠について書いた文章を  
たまたま見つけましたけど、図面に細かい寸法まで描いて





場所：大阪府河内長野市、延命寺／日時：2017年10月20日

## 「音楽を感じさせる庭」

●森先生が延命寺境内で作った庭は3つあります。本堂北の枯山水と、本堂西の池庭と、玄関前の平庭です。延命寺にその図面が残っているので、最初に描かれたものと、現在残っているものを比較することができておもしろいですね。

古川…図面に近いけど、図面どおりではない。その違いがおもしろいですね。森先生も、図面にこだわらなくていいとよくおっしゃっていました。図面は第三者に渡すときに必要でしょうけれども、あくまで雰囲気伝えるためのものです。実際に、図面どおりにしたからっていいものができるとはかぎらないのです。図面どおりにできるところは2、3割だと思えます。図面どおりにいかないほうがいい

ありましたから、この露地に下手な灯籠を入れたらめっちゃ怒られるだろうと思いました。しかし、ご住職は灯籠がほしいと言われるし、蹲踞<sup>つづぐ</sup>を作るなら灯籠は絶対に必要でしたので、こっそり京都の白川で探してきて、恐る恐る据えたら、この灯籠なら私も欲しいと花丸をもらえました。とても嬉しかったですね。

●この庭を作られてからほぼ50年経ちましたが、大きく変わったことはありませんか。逆に、変わっていないことはなんでしょうか。

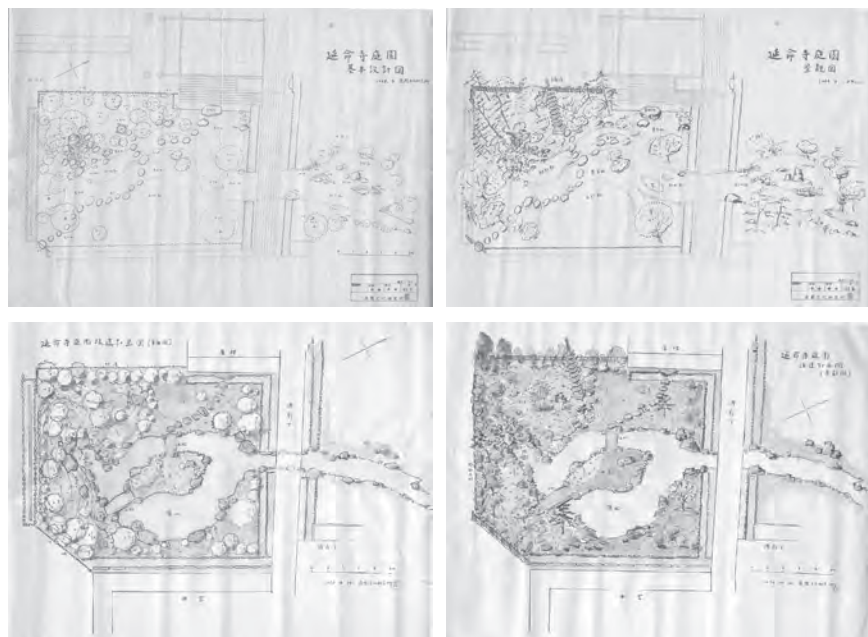
古川…森先生は庭園遺構を研究されていたから、庭というものはどういうかたちで残るかというのはさすがによく知っておられました。樹木なんていうのはその時その時に移り変わるものだからほとんど問題外でした。最終的に残るものは地形と石組しかない。それも、時間が経てば残るかどうかわからないのです。たとえば、ここの地形は一気に下がっていて、土が流れやすいので、あとから土留めを作りました。茶室に座っているとちろん見えないんですけども。

●森先生は学者として高く評価されているけれども、作庭の活動をしていたということはほとんど知られていませんね。作庭家として評価されるときはくるのでしょうか。

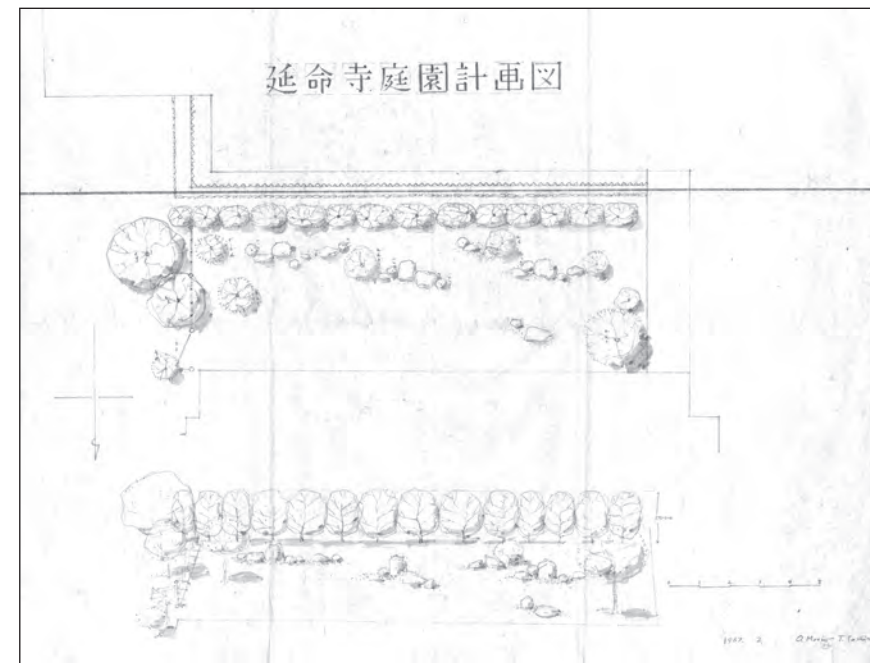
古川…学者として、森先生は怖い存在ですね。でも、森先生の庭はなかなか理解されないでしょうね。特に今の時代は何か衝撃的なもの、インスタ映えするもの、劇的なものをもつてないと理解されないですね。森先生の庭はわかりにくいんですが、鯉節や昆布の出汁みたいな、ほんとうにいい味がするんですよ。うま味の庭というか、作った庭ではなくて、存在している庭ですね。

森先生の庭は美術品として片づけることできない、在る庭です。美術品は嫌になったら、片づければいいでしょう？ ピカソの絵だって、ずっと飾っていると飽きると思いますよ。庭はやっぱりそういう世界とは違う。形のない、あっても気がつかない、水や空気に近い世界です。究極は何もなくなっただけいいわけですよ。空間さえあればいいのです。

(了)



上：森蘊による延命寺本堂西庭図面（上：1968年9月、下：1973年4月、延命寺蔵）／  
下：延命寺本堂西庭（マレス、2013年撮影）



上：森蘊による延命寺本堂北庭図面（1967年2月、延命寺蔵）／  
下：延命寺本堂北庭（マレス、2013年撮影）



い場合だってあるわけですよ。現場は違いますから、もちろん、地形に合ったことをすれば、という話ですが。

●本堂西の池庭は現在枯池になっています。上田住職によると、水源が枯れたということで古川さんが枯池にアレンジしたそうですね。また近年にできた新しい建物に合わせて古川さんが改造されたとおっしゃっていました  
「↓176頁を参照」。

古川…ここは枯池になってよかったと思います。石組がよく見えるようになって、落ち着きました。奥の滝石組なんか、森先生は桂離宮の鼓の滝を意識して作っていると思います。森先生は古い良い庭が頭の中にあるから、地形を見たら、それに合うものがすぐ浮かんだと思います。過去にとらわれることはなかったけど、ヒントにはされています。結局、いろんな試みをしたのでしゅうけれど、やっぱり『作庭記』に返らざるを得ないというか、『作庭記』から逃げられなかったと思います。

森先生は石組を作るときはいつも明るかったです。一つの石だけを見せようと思うとたいへんですけど、石を組む

か、土壌かわかりませんが、モミジにはすごく適してるんでしゅうね。森先生は土地柄をよく理解したうえでのことだと思っています。

●庭を作るとき、森先生は地形と環境を重視していたということでしょうか。

古川…とにかく、一番大事なのは地形だといつもおっしゃっていました。私は九州から出てきたときに庭が地形だなんて言われてもぴんとこなかったですよ。庭はやっぱり石組だと思っていました。しかし、一緒に作業してみると、なるほど、庭っていうのは地形なんだな、地形さえきっちりすれば石は二の次なんだということがよくわかりました。だから、地形に合った石組をすることが大事ですし、その石も地形なのです。

最近、田中泰阿弥(たいあみ)(1898-1978)という作庭家の特集を読みなおしましたが、庭は「排水」だっていうわけですよ。なるほどな、この2つの言葉の選択には学者と庭名人との違いがよく出てるなと思いました。まあ、言葉や立場はともかく、どうやって水を処理していくかと考え

というのは、まさに『作庭記』にあるように「その石の乞わんに従いて」作業します。一つの石を据えたら、その石が何を欲しがっているかというのを察して次の石を据えてやる。まさに石と遊んでいるようで、そういうのが森先生としては楽しかったらうなと思います。森先生の庭は『作庭記』の世界であり、また『鳥獣戯画』の世界でもあります。やっぱりリズムがあるし、メロディーがあります。あんなに音楽を感じさせる庭は少ないですね。森先生は音楽の話をよくしていたわけではないのですが、私に言わせれば、森先生の庭はリズムミカルで天から降ってくるモーツァルトの音楽だと思うんですけど。

●延命寺は昔からモミジの名所ですが、図面にモミジがたくさん描かれていますし、実際に今もよく茂っていますね。

古川…ここは意外と木の成長がいいので、思いきって切れるんですよ。思いきって切っても、次の年になるとさらに増える。やっぱりすごい土地柄だなと思います。その中でも、モミジが特によく育ちますね。山間部の湿気のぐあい

ると、庭が自然にできてくるわけです。

●手入れをされるとき、古川さんは植物と石とのバランスをどういうふうに保っていますか。

古川…植物が大きくなりすぎたら、ある程度切りますが、いつも自然の形に戻るように入れます。たとえば、本堂の北側にサンゴジュの生垣がありますが、傷んでいたので一度根元に近いところで切りました。今は、新たに出了た芽でまとめている段階です。あと少しでちょうどいい高さになりそうです。でも、その間にモミジがかなり大きくなりましたね。

当初は植物が小さかったので、その手前にある七五三の石組はよく見えていました。石は苔にも覆われていますが、取ってもあまり意味がないですね。要するに、見えても見えなくてもいいわけです。龍安寺のような思い込ませる庭ではないですから。作品ではないのです。

●それでは、森先生の庭の意味というのは何ですか。

古川…わかろうとすればするほどわからないと思います



延命寺庫裏前庭（マレス、2013年撮影）

（笑）。作るときに何かを伝えたかっただろうけれども、ひとさら庭を通して伝えなければならぬものというのは特にないですからね。あったとしてもそれは自己満足。だから、森先生はあまり崇められるのも好きではなかったのです。

●昭和の造園界を振り返ったとき、森先生はどう位置づけられると思いますか。

古川…そうですね、ちょうどいいあんばいに相対するところに、重森三玲という人物がいます。重森さんがいたから、森先生もおられたと思います。方向が違うというか、私はよく映画監督の黒澤明と小津安二郎に例えます。インバクトが強い黒澤明の作品はどこか重森三玲の庭と似ていますね。でも、インバクトが映画の世界のすべてではないでしょう。森先生は地形というか、地平線を意識する。小津安二郎の映画で描かれている日常生活みたいなものです。三玲さんは、どうしても石を立てて、上に上に向かい見せよう見せようとするのですが、森先生は小津安二郎みたいにカメラを低く据えて、気づけるものがあれば気づい

たらよいといったようなところがあります。私は見たことがあるのですが、何かの映画専門誌、確か英国だったと思います。これまでの映画のランキングが載っていて、小津の『東京物語』が一位でした。確か『タクシードライバー』や『2001年宇宙の旅』などが連なっていたように思います。黒沢の映画は載っていませんでした。

あえて言うなら、重森三玲と森蘊、この二人で造園の世界が成り立っていると思います。もちろん他にいないわけではないのですが、作家でいうならば、太宰治と志賀直哉。写真家では、土門拳と入江泰吉。方向は違っていますが、それぞれが自分なりの空間を作っています。そしてこの二者は、ほどよい周期で交互に現われ必要とされていると思います。

●今、重森三玲の庭は有名になって、国指定の名勝になっているところもありますが、森先生が設計した庭は公開されているところも少なくて、ほとんど知られていません。今後はどう継承していけばよいのでしょうか。

古川…森先生の庭はフォローによって決まる、と言えると

ころがあると思います。七・五・三のような感性だけでできる枯山水の庭だと、それほどフォローは難しくないので、水を扱う池や流れとなるとフォローする者の感性が重要になってくる。物理的に水は漏らしてはいけないし、見た目も自然でなくてはいいけない。水景につきものの州浜など、傾斜がおかしいと小石の石積になり、とうてい州浜とは思えなくなります。そして、最も重要で、最後まで続くフォローは樹木の手入れにあると思います。名園と称される京都をはじめ各地の庭も、ほとんどが手入れが安易で、本来の庭の姿とは思えない。その点、三玲さんの庭は樹木が少なく、形として扱っているのです、その形の継承も楽に思いますが、森先生の庭はそういうわけにはいいかない。あくまで自然でなくてはいいけないし、といって自然に任せるわけにもいいかない。それだけに、その庭の良さがわかった者でなければ、庭の手入れは難しい。慣習的に安易にやっ

てしまうと、庭の良さは消えてしまうんですよ。

（了）